



Title	低環境負荷建物のエネルギー消費実態と設計手法 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	品川, 浩一
Citation	北海道大学. 博士(工学) 甲第15375号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89585
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kouichi_Shinagawa_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士(工学) 氏名 品川 浩一

審査担当者 主査教授 森 太郎
副査教授 長野 克則
副査教授 林 基哉
副査准教授 若林 斉

学位論文題名

低環境負荷建物のエネルギー消費実態と設計手法

(Actual Energy Consumption and Design Methods for Low-Environmental Impact Buildings)

国や地方自治体では、2025年に新築の半分以上をZEB(ZEB Oriented 相当以上)にするような動きが加速しており、国も2030年以降に新築される住宅・建築物についてZEH・ZEB基準の水準の省エネ性能の確保をめざし、建築物省エネ法による省エネ基準適合義務化と基準引き上げ、建材・機器トッランナーの引き上げなどに取り組むとしている。ただし、外皮仕様の高性能化、高効率機器や省エネ制御など、ZEB化技術の導入を中心とした設計だけでは、ZEB達成は困難である。これは、2014年に閣議決定された「エネルギー基本計画」において、「2020年までに新築公共建築物等で、2030年までに新築建築物の平均でZEB(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル)を実現することを目指す」としていたが、国土交通省が、「2022年4月より、官庁施設の新築は規模に関わらずZEBを必須とする」と、規定を強化していることから明らかである。

本論文では、建築手法(高性能外皮・自然換気)や設備手法(高効率設備・制御)を高度に組み合わせたZEBを目指した建物の空調設備を対象とし、様々なZEB化手法の感度解析を利用した設計法を提案することを目的とする。

本論文は以下の7章によって構成されている。

第1章「序論」では、ZEBに関する研究の背景をまとめ、本論文の目的と概要を示した。

第2章「既存建物のエネルギー消費実態について」では、実在事務所ビルの運用データを基にしたモデル化を前提条件としたBESTによるシミュレーションをおこない、冷暖房能力の推計に対する有効性の確認をした。また、空調機冷暖房能力と消費電力の実測結果から機器特性の分析結果とその課題を示した。

第3章「ZEBを目指した建物の空調負荷の特性について」では、最大・年間負荷計算では、自然換気、外気導入制御、昼光利用・調光制御などを考慮した検討が必要であり、予冷熱時間の最適化、年間装置負荷の可視化を活用したパッシブデザインとアクティブデザインの最適化するための設計方法を示した。カーボンニュートラルを実現するためには設計初期段階からこうした検討が重要であることを示した。

第4章「空調機器特性のデータベース化について」では、熱源機器特性では、中央および個別分散熱源機器について、統計モデルと物理モデルを利用し、定格性能・中間性能・動特性データセットを組み合わせた柔軟性・拡張性の高いデータベースの開発、および、中央熱源方式における搬送機器(ポンプ・送風機)について、搬送部分、電動機、インバータに関する柔軟性・拡張性の高い

データベースの開発を示した。

第5章「ZEBを目指した建物のシミュレーションと実測の比較」では、庁舎をモデルとし、ZEB化メニューの複合導入効果によるZEBの可能性と、平成25年省エネルギー法基準相当の基準建物およびZEBを対象としたZEB化メニューの単独導入効果について検討した。ZEB化メニューに対する省エネルギー・ピーク電力削減の影響が、従来の基準仕様をベースとした評価と、ZEBを基準とした評価では傾向が異なっており、ZEB計画時に配慮することが重要であることを示した。

第6章「ZEBの設計手法について」では、本研究で提案した標準オフィスビルのエネルギー・環境シミュレーションを感度解析及びその分析から、ZEBを計画する上で重要な以下の知見として、1) 標準的な省エネルギー性能となる中規模・大規模標準オフィスビルの基準階平面・建築仕様・設備仕様標準仕様を提案、2) 中規模標準オフィスビルに一般的に使用されている省エネルギー手法を導入した3仕様(標準・省エネ・ZEB)の省エネルギー性能、室内環境についての評価結果、3) 省エネ設計手法の一次エネルギー削減効果、空調負荷削減効果の交互作用についての評価、中規模オフィスにおける省エネ手法の優先度をバックキャストにより検討可能な手法の提案、を示した。

第7章「総括」では、本研究で得られた成果の総括と今後の展望について示した。

これを要するに、本研究は、カーボンニュートラル化にとって重要な要素であるZEBの設計手法の確立を目的に、BESTによる既存建物のエネルギー消費の評価、BESTへの詳細な機器特性の導入を行い、それらをツールとして中規模オフィスのZEB化の優先度をバックキャストにより検討可能な手法の提案を行った。これらは今後のZEBの設計、運用に関して新たな知見を得たものであり、建築環境学、建築設備学およびエネルギー利用工学に貢献するところ大なるものがある。よって著者は、北海道大学博士(工学)の学位を授与される資格あるものと認める。